

【資料】

## 新立山の蝶相

西田迪雄

筆者は4年前より宗像市の東南に位置する新立山（標高 326m）の登山道での蝶の撮影を通してその地に棲息する種の調査を行ってきた。新立山における蝶の調査は過去に実施されたことがない。その理由は殆ど全山杉の人工林のため、蝶の幼虫が食べる食草が貧弱であり、昆虫研究家にとり魅力ある場所とは言えなかったことにある。しかし、昆虫、特に蝶に関しては未調査の地であるので、ここで観察した蝶を紹介するのは意義深いものであると考える。

新立山の登山道は良く整備されており、急坂の箇所は少ないので休日にはハイキング気分で登る人がちらほら見られる。登山道入り口は「正助ふるさと村」で、ここには大駐車場があり、これを上ったところに貸し農園がある。駐車場と貸し農園との間には秋になると彼岸花（写真 1）が満開になり、これにアゲハが吸蜜に来るのが見られる（写真 2）。

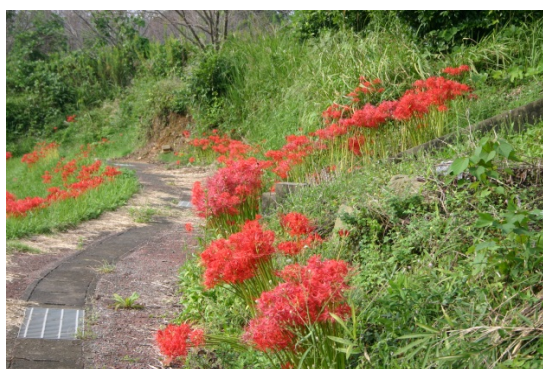


写真1 彼岸花満開

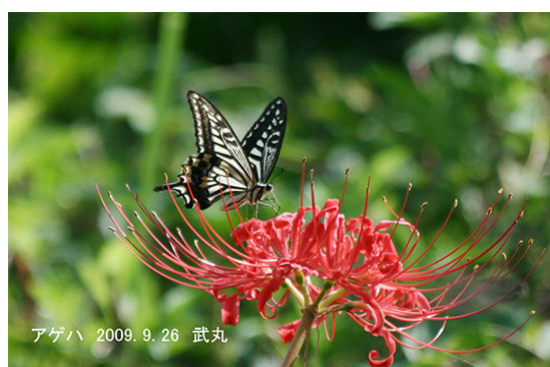


写真2 アゲハ 2009-9-26

この彼岸花の上には貸農園が広がっている。猪が多いので貸し農園は木製の柵で囲まれている。3月中旬を過ぎると、貸農園の中では馴染み深いモンシロチョウ（写真 3）が飛び回っているが、柵の外側の林縁ではこれに似た少し大きい白い蝶がフワフワと優雅に舞っている。スジグロシロチョウ（写真 4）である。この蝶は柵の中の畑に入ろうとしない。



写真3 モンシロチョウ 2011-3-29



写真4 スジグロシロチョウ 2011-4-20

貸農園を過ぎて新立山へ向かう。左右に段々畑が広がっている（写真 5）。春の時期には路傍のノイバラの花に吸蜜に来るキタキチョウが見られる（写真 6）。キタキチョウは一般にキチョウと呼んでいる黄色の蝶で、これも馴染み深い蝶であるが、2005 年従来のキチョウが南西諸島に分布するキチョウと南西諸島より北の九州、四国、本州等に分布するキタキチョウに分離された。



写真 5 新立山登山道



写真 6 キタキチョウ 2011-3-29

路傍にはキタキチョウとは異なる黄色の蝶が見られる。これはモンキチョウ（写真 7）で、飛んでいるときにはキタキチョウと見誤られるが、止まると紋があるのでこの種だと確認できる。モンキチョウのオスの翅は黄色であるが、メスは乳白色となる。また、コムスジ（写真 8）は 1 年を通して見ることができる。このコムスジの仲間にミスジチョウとホシミスジがいるが、いずれも葉に止まって翅を開くと、3 本の白い線（筋）が見える。そのうちで小さい本種をコムスジ（小三筋）と名付けられた。この蝶は飛び方がフワフワと滑空するように飛ぶので、一目でこの蝶だと分かる。ミスジチョウとホシミスジは新立山には産しない。



写真 7 モンキチョウ 2011-3-29

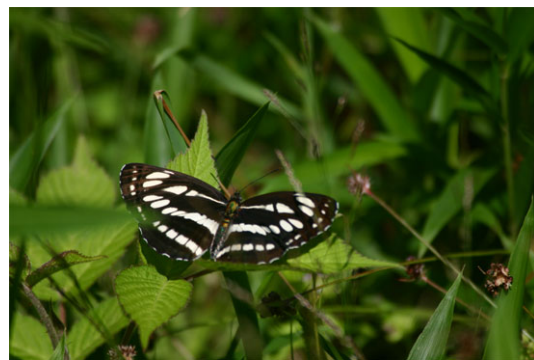


写真 8 コミスジ 2010-5-16

この辺りでは 4 月中旬以降になると、ツマグロヒョウモン（写真 9・10）、ヒメウラナミジャノメ（写真 11）が観察できる。ツマグロヒョウモン（棲黒豹紋）のメス（写真 10）はつま（棲）が黒く、翅全体が豹紋模様の蝶という意味だが、オスは写真 9 に示すように棲が黒くない。このようにオスとメスで、その模様が異なる蝶は他にも多数いる（例えば、先に述べたモンキチョウやヤマトシジミ、ツバメシジミ等々）。この蝶は元々、南方系の蝶であったが、環境適応能力が高いためか、40 年前より次第に北上し、現在では関東北部から北陸まで棲息を広げていると考えられる。幼虫はスミレ類を食べるので、庭にもしばしば飛来して、パンジーに卵を産みつける。庭の



花壇にパンジーを植えることが広まったので、この蝶が分布を北へ拡張していった原因の一つとして考えられる。



写真9 ツマグロヒョウモン (オス) 2011-5-5

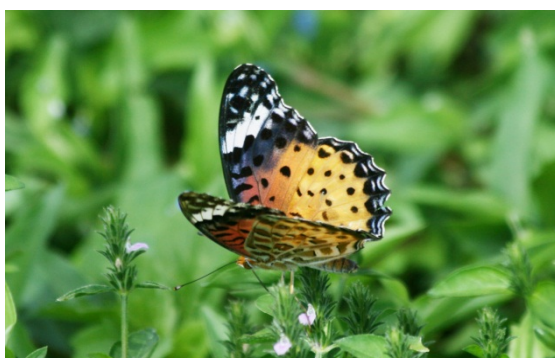


写真10 ツマグロヒョウモン (メス) 2010-9-26

ヒメウラナミジャノメ (姫裏波蛇の目) (写真 11) は4月中旬より現れ、1年中貸農園周囲や登山道で見られ、個体数は非常に多い。翅の裏が波模様になっており、その中に蛇の目紋がある小さい蝶と言う意味である。この蝶よりやや大きい蝶にウラナミジャノメ (裏波蛇の目) (写真 12) がいる。後翅裏面の蛇の目紋はヒメウラナミジャノメでは5個、ウラナミジャノメでは3個であるので、その相違はすぐに分かる。このウラナミジャノメは6月中旬～下旬に1化が、9月上旬に2化がこの登山路に現れる。図鑑には局所的に産すると述べられているが、宗像市内では、ここ武丸の他に名残、明天寺、大島でも棲息を確認している。しかし数は少なく、福岡県レッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類に登録されている。



写真11 ヒメウラナミジャノメ 2011-7-18

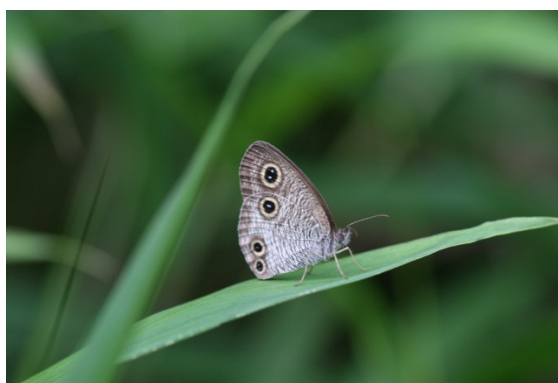


写真12 ウラナミジャノメ 2010-6-20

登山道は右に杉林、左に耕地の場所に至る (写真 13)。この付近ではダイミョウセセリ (写真 14) が5月より見かける。後翅表面に白い斑紋があるものを関西型、ないものを関東型と呼んでいる。宗像にはもちろん関西型しか棲息しない。

また5月下旬よりクロセセリ (写真 15) が現れる。元々九州の固有種であったが、最近では山口県での棲息が報告されている。午前8時頃までに行くと、草の上で日光浴をしているのが見られ、カメラを近づけても逃げないし、飛び立ってもすぐ近くの葉に止まるので撮影が楽だ。



写真 13 登山道



写真 14 ダイミョウセセリ 2011-5-13



写真 15 クロセセリ 2010-5-30



写真 16 イシガケチョウ 2009-5-31

さらに 5 月下旬よりイシガケチョウ（写真 16）にも出会える。フワフワと滑空するように飛ぶが、一旦驚かせるとスピードを上げて逃げ去っていく。この蝶も元は南方系の種で、50 年前までは南西諸島以外に九州、四国、本州の太平洋岸の暖かい限られた地域にしか棲息していなかった。しかし、今日では九州では何処でも見かけられる普通種になってしまった。

写真 13 の左側の耕作放棄地では、5 月中旬、ナガサキアゲハ（写真 17）が見られる。ナガサキアゲハにはアゲハチョウに特徴的な後翅の尾状突起がない。また、雌雄で非常に大きく異なっている。新立山登山道で撮影したメスの画像がないので、参考として熊本市で撮影したメスの画像を示す（写真 18）。ナガサキアゲハの名前はシーボルトが長崎で最初に採集したことに由来する。



写真 17 ナガサキアゲハ（オス） 2010-5-18



撮影地 熊本市池田

写真 18 ナガサキアゲハ（メス） 2008-8-20



写真13の付近ではクロヒカゲ(写真19)が葉の上で翅を広げて日光浴をしているのが観察できる。この蝶に似るが、翅の色がやや薄いヒカゲチョウがいる。この蝶は九州では希少種に属し(福岡県絶滅危惧Ⅰ類)、宗像市内ではまだ発見されていない。筆者が以前に住んでいた京都市郊外では、ヒカゲチョウは里山の何処でも見られる普通種であるが、クロヒカゲはやや個体数が少なく、九州とは逆転している。写真13の右側の林で2011年5月クロコノマチョウを発見した(写真20)。越冬した成虫なので、翅にはかなりの損傷がある。この蝶は薄暗い樹林が好きで、一般には明るい場所では見かけない。一旦、落ち葉に止まると翅の色が周囲に溶け込んで、見つけ出すのが難しい。普通種であるが、何処にでもいるものではなく、宗像市内で筆者が棲息確認している別の場所は自由ヶ丘遊歩道の林内である。



写真19 クロヒカゲ 2010-5-29



写真20 クロコノマチョウ 2011-5-14

さて、道は薄暗い杉林(写真21)に入っていくがすぐに開けた所に出る。右側は1つ目の池。道は堰堤の上を行く(写真22)。3月下旬、この辺りでブルーの小さい蝶が飛び交っている。ルリシジミである。この蝶は案外出現が早く、この蝶を見ると本格的に春がやって来たと感じられる。堰堤の左の斜面には5月連休を過ぎると、アザミが一斉に咲き誇り、これに大型のアゲハ類が好んでやって来る。アオスジアゲハ(青筋揚羽)(写真23)、モンキアゲハ(紋黄揚羽)(写真24)、クロアゲハ(黒揚羽)(写真25)、ジャコウアゲハ(麝香揚羽)(写真26)、カラスアゲハ(烏揚羽)(写真27)、ミヤマカラスアゲハ(深山烏揚羽)(写真28)等々。カラスアゲハは名前の一部の「カラス」(黒)のイメージとは程遠い美しい翅を持つ。ミヤマカラスアゲハもカラスアゲハと同様に美しい翅を持つ。ミヤマ(深山)が付いているので、深い山に棲息しているように思われるが、新立山の山麓部に生息しており、また、地島や城山でも棲息を確認している。



写真21 杉林に入る



写真22 1つ目の池



写真 23 アオスジアゲハ 2011-5-13



写真 24 モンキアゲハ 2011-5-17

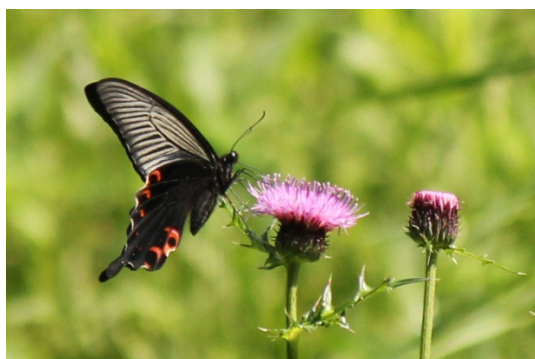


写真 25 クロアゲハ 2011-5-14



写真 26 ジャコウアゲハ 2011-5-13



写真 27 カラスアゲハ 2011-5-17

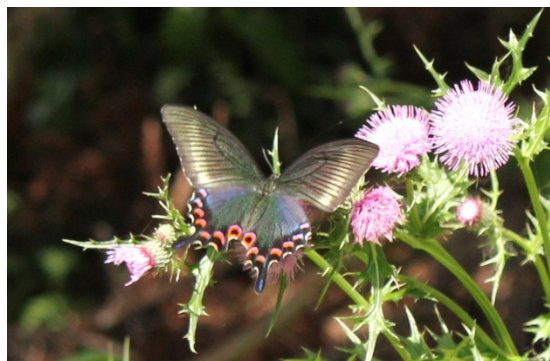


写真 28 ミヤマカラスアゲハ 2011-5-13

1つ目の池を過ぎると2つ目の池が右側に見える(写真 29)。この堰堤(写真 30)とその斜面に咲くアザミにも大型のアゲハ類が吸蜜に来る。8月のお盆が過ぎる頃、この付近で、福岡県絶滅危惧Ⅱ類のヒメキマダラセセリ(写真 31)と準絶滅危惧種のオオチャバネセセリ(写真 32)の確認をしている。





写真 29 2つ目の池



写真 30 2つ目の池の堰堤

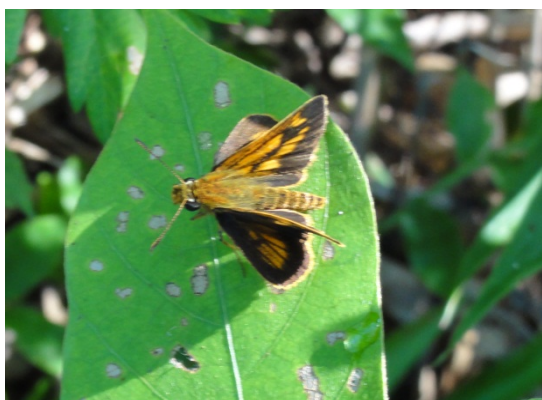


写真 31 ヒメキマダラセセリ 2011-8-21



写真 32 オオチャバネセセリ 2010-8-21

さらに道を進むと右側に沼が見える。ここまでの区間で8月中旬になると、ゴイシシジミ（写真 33）が多産する。棒で笹を叩くと飛び出して、すぐ近くの笹に止まるので発見は至って簡単である。この蝶の幼虫は笹の葉につくアブラムシを食べる食肉性で、成虫になるとアブラムシが出す汁を吸う。ここで以前、猪の幼獣ウリボウ 2 匹が登山道に出てきているのを見た。実際、新立山には猪が多いらしい。武丸地区の老婦が「一晩で畑の作物を全て食い尽された」と言っていたのを思い出す。

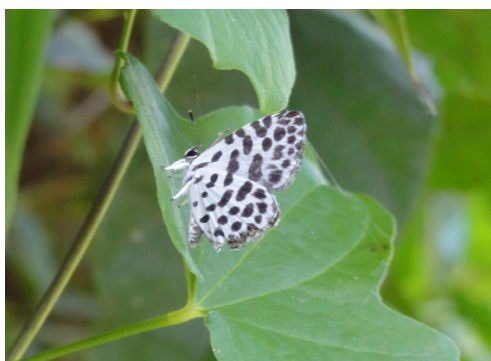


写真 33 ゴイシシジミ 2010-8-21

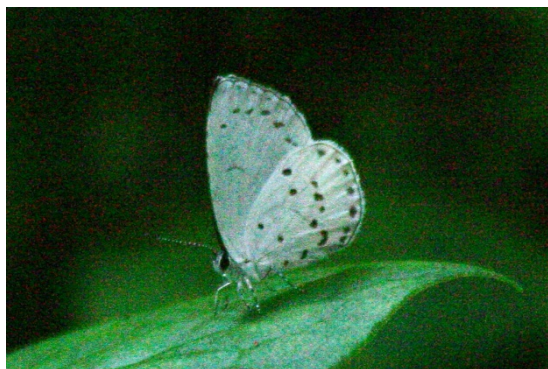


写真 34 サツマシジミ 2008-8-11

ここを過ぎると再び薄暗い杉林に入る。登山道は山仕事のための軽トラックが走れる程度の幅と傾斜なので楽に歩ける。この杉林の区間で過去にサツマシジミ（写真 34）を撮影したことがあるが、その後一度も出会うことがない。写真 34 は裏面のみの画像であるが、表面は縁が薄いブルーの美しい翅を持つ。道を進むと、時々杉の木の間の陽が差し込む場所でコムスジ、カラスアゲハに出会うのみである。「正助ふるさと村」から約 30 分程度まで来ると、道は階段状になる。軽トラックが入れる幅の広い道はここまでである。ここからは少々急坂だが、我慢して登り抜け出るとまた傾斜が緩やかになり、開けた区間に入る。頂上はもうすぐだ。ここでも笹にゴイシシジミが観察でき、その数は山麓部よりこちらのほうが多い。ダイミョウセセリもここで見つけられる。頂上のすぐ下に広い草原があり、ツマグロヒョウモンが多く、また山麓部では余り見られなかったキアゲハ（写真 35）がアザミで吸蜜している。



写真 35 キアゲハ 2009-6-14



写真 36 サトキマダラヒカゲ 2011-5-13

ここから少し急坂を上がるとすぐ頂上に至る。頂上には大きい桜の木があり、その下のベンチに座ると、心地よい風が登ってきた疲れを吹っ飛ばしてくれる。頂上から 360 度の展望が開けており、玄界灘まで見える。頂上ではツマグロヒョウモンが非常に多く、縄張りを主張し合っている。そこへキアゲハが割り込んでくる様相が見られる。

さて、もう一度貸農園まで戻り、その奥にあるコナラ林へ行こう。そこには地味な翅色を持つサトキマダラヒカゲ（写真 36）に出会える。以前はキマダラヒカゲと呼ばれていたが、1970 年にサトキマダラヒカゲとヤマキマダラヒカゲに分離された。新立山にはサトキマダラヒカゲしか棲息していない。

ゼフィルス（ラテン語の西風というの意味）と称されるシジミチョウ科ミドリシジミ類に属するミズイロオナガシジミとアカシジミ（両種とも福岡県絶滅危惧Ⅱ類）はクヌギやコナラを食草として、5 月下旬～6 月上旬に羽化して出現する。筆者はこのコナラ林にも棲息している可能性が高いと考え、何度もここでゼフィルスを探索したが、その姿はなく、結論としてミズイロオナガシジミとアカシジミはこのコナラ林には生息していないと言わざるを得ない（ミズイロオナガシジミは宗像市内の他の場所で棲息を確認）。

新立山には希少種（絶滅危惧Ⅰ類\*）は棲息しないが、絶滅危惧Ⅱ類\*\*が 2 種（ヒメキマダラセセリ、ウラナミジャノメ）と準絶滅危惧†1 種（オオチャバネセセリ）が棲息している。山麓部で里山に普通に生息するコツバメ（福岡県絶滅危惧Ⅱ類、4 月上旬～中旬のみ発生）及びツマキチ



ョウ（4月中旬～5月上旬のみ発生）を探したが、結局発見できなかった。しかしツマキチョウは宗像市朝町に棲息しているので、新立山登山道で発見される可能性は高い。一方、コツバメは棲息していないと推測される。

新立山にはアゲハチョウ科9種、シロチョウ科4種、タテハチョウ科15種、シジミチョウ科8種、セセリチョウ科5種、計41種の棲息を確認している。表1に現在確認している新立山の蝶の棲息分布を示す。本報告でもって新立山の蝶が全て調査されたわけではなく、今後も調査を継続する必要がある。

表1 新立山の蝶棲息分布

科	和名	貸農園とその周囲	貸農園から杉林まで	1つ目と2つ目の池付近	中腹の杉林	山頂及び山頂付近
アゲハチョウ科	アオスジアゲハ	○	○	○	○	
	アゲハ	○	○			
	カラスアゲハ		○	○	○	
	キアゲハ	○				○
	クロアゲハ			○		
	ジャコウアゲハ			○		
	ナガサキアゲハ		○			
	ミヤマカラスアゲハ			○		
	モンキアゲハ			○		○
シロチョウ科	キタキチョウ	○	○			
	スジグロシロチョウ	○	○	○		
	モンキチョウ	○	○			
	モンシロチョウ	○	○			
タテハチョウ科	アカタテハ	○	○	○		
	アサギマダラ		○			
	イシガケチョウ		○			
	イチモンジチョウ		○			
	ウラナミジャノメ		○			
	キタテハ	○	○			
	クロコノマチョウ		○			
	クロヒカゲ	○	○			
	コミスジ	○	○	○	○	
	サトキマダラヒカゲ	○	○			

	ツマグロヒョウモン	○	○			○
	ヒメアカタテハ	○	○			
	ヒメウラナミジャノメ	○	○	○		
	ヒメジャノメ	○	○			
	ルリタテハ		○			
シジミチョウ科	ウラギンシジミ	○				
	ゴイシシジミ			○		○
	サツマシジミ				○	
	ツバメシジミ		○			
	ベニシジミ	○	○			
	ムラサキシジミ	○	○			
	ヤマトシジミ	○	○			
	ルリシジミ	○	○	○		
セセリチョウ科	イチモンジセセリ	○				
	オオチャバネセセリ		○	○		
	クロセセリ			○		
	ダイミョウセセリ	○	○	○		○
	ヒメキマダラセセリ			○		

\* 2001 年福岡県絶滅危惧Ⅰ類：絶滅の危機に瀕している種

\*\* 2001 年福岡県絶滅危惧Ⅱ類：絶滅の危険が増大している種

† 2001 年福岡県準絶滅危惧：現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの